

第3回 環境大学・環境学習円卓会議
2011年11月15日

水俣連携大学院構想 (素案)

※連携大学院:本構想では、大学院設置基準 第31条に基づき、国公私を通じた複数の大学が大学院研究科等を共同設置したものを指す。

複数の大学がそれぞれ優位な教育研究資源を結集し、共同でより魅力ある教育研究・人材育成を実現する大学間連携の仕組みで、2009年3月に制度化された。

第3回円卓会議での検討事項

■水俣連携大学院構想(大学等に対する営業資料)のブラッシュアップ

【全体】

- ・営業資料として改善点はないか。どのように改善すれば良いか。

【2.「使命」の実現を支える基盤】

- ・研究対象として使える人材・素材として具体的に何があるか。
- ・大学等にアピールできるものは何か。

【7.現時点で考えられる支援メニュー(案)】

- ・市民としてできる実現可能な支援メニューとして何があるか。

■今後の戦略・役割分担

【営業方策】

- ・つながりのある大学や先生等に対して個別訪問
- ・情報発信(ホームページに掲載、大学に資料送付、等)

【情報収集】

- ・水俣に対する関心の有無
- ・新たに研究科・専攻の設置を検討している大学院
- ・キャンパス移転を検討している大学院

1. 水俣連携大学院の使命

世界・日本・水俣の現状

地球規模での社会課題の進展

- 経済成長著しい新興国等における環境問題の進展
- 人口増加の先に顕在化する高齢社会の現出

日本の地域社会がおかれている現状

- 人口減少・少子高齢化・地域経済の停滞
- エネルギー資源や食の安全性確保に対する不安

水俣病問題の解決に向けた各種の取り組み

- 環境保全、環境課題の解決に向けた取り組み
- 地域社会の絆の修復、地域再生・融和に向けた取り組み

解決が期待されている諸課題

世界・日本・地域が解決すべき諸課題

- 持続可能な都市・地域の実現
- 産業振興と環境保全の両立
- 健康や命を重視した社会システムの構築・実践

水俣に求められている使命

- 環境と経済の両立に向けた学際的・実践的研究
- 国際的・学際的・共創的な人材の育成・輩出
- 国内外に対する社会貢献、積極的な情報提供

水俣連携大学院の使命

- 国内外の教育・研究機関が連携して、水俣病を経験した地域が蓄積してきた知見(失敗と再生)を、国内外の課題解決に役立つ知見として普遍化すること
- 水俣全体を実践フィールドにしながら水俣の環境まちづくりを支援し、未来に渡って世界の環境モデル都市として導き続けること
- これらの過程で得られたナレッジ(情報、経験、知識、知恵)を体系化することで、持続可能な社会構築に向けた課題解決策を国内外に提示し、かつ、その担い手を育成すること

2. 「使命」の実現を支える基盤

豊富な人材や素材を有する「研究フィールド」としての水俣

人材

- 水俣病被害者と原因企業が共存する地域
- 行政と市民の連携による環境やまちづくりの取り組み
- 水俣における各種の取り組みを支える多彩で個性的な組織や人材
- 水俣に関心を持つ地域外の組織や人材

素材

- 世界的な知名度を有する公害の原点に直接向き合える場所
- 水俣川の源流から河口(山・川・海)まで多様な素材がコンパクトに集積
- JNCやエコタウンなど環境に関連する企業の存在
- 水俣病に関する官民の研究・教育施設の存在
- 環境モデル都市の具現化に向けた各種の新しい取り組み

研究成果を効果的に活用・発信できる「実践フィールド」としての水俣

活用・発信

- 行政や市民のバックアップ・連携による現実のまちづくりへの研究成果の反映
- 水俣の世界的知名度の活用・情報発信・プレゼンス向上

3. 水俣連携大学院の方向性

水俣連携大学院の使命



水俣市民
市のニーズ

- 地元の人材育成機能
- 市民のまちづくり活動の支援機関としての機能
- 大学を核とした地域社会への貢献、交流人口の増加、雇用創出
- 水俣の環境まちづくりのシンクタンク機能



水俣連携大学院に求められる機能

① 学際的研究機能

② 人材育成機能

③ 情報発信機能

④ シンクタンク機能

⑤ コーディネーション機能



学際的・実践的な視点から高度化・複雑化する社会課題を解決する人材を輩出

4. 求められる教育・研究内容

水俣連携大学院に 求められる機能

① 学際的研究機能

新たな課題解決策の研究・提案機能

② 人材育成機能

国内外で活躍する人材の育成機能

③ 情報発信機能

水俣が有する知識・経験を国内外に発信

④ シンクタンク機能

まちづくりを推進する知的基盤として機能

⑤ コーディネーション機能

行政・企業・市民・研究機関の橋渡し機能

求められる教育・研究内容(例)

① 環境社会医学

世界の発展途上国の研究者、行政官、NPOなどを対象に想定した実践的研究を行う。医学と社会学の垣根を超えた学際的研究に重きを置き、医学及び医療と法・社会環境の接点で生じる学際的諸問題の解決方策について研究する。

② 環境科学(環境まちづくり)

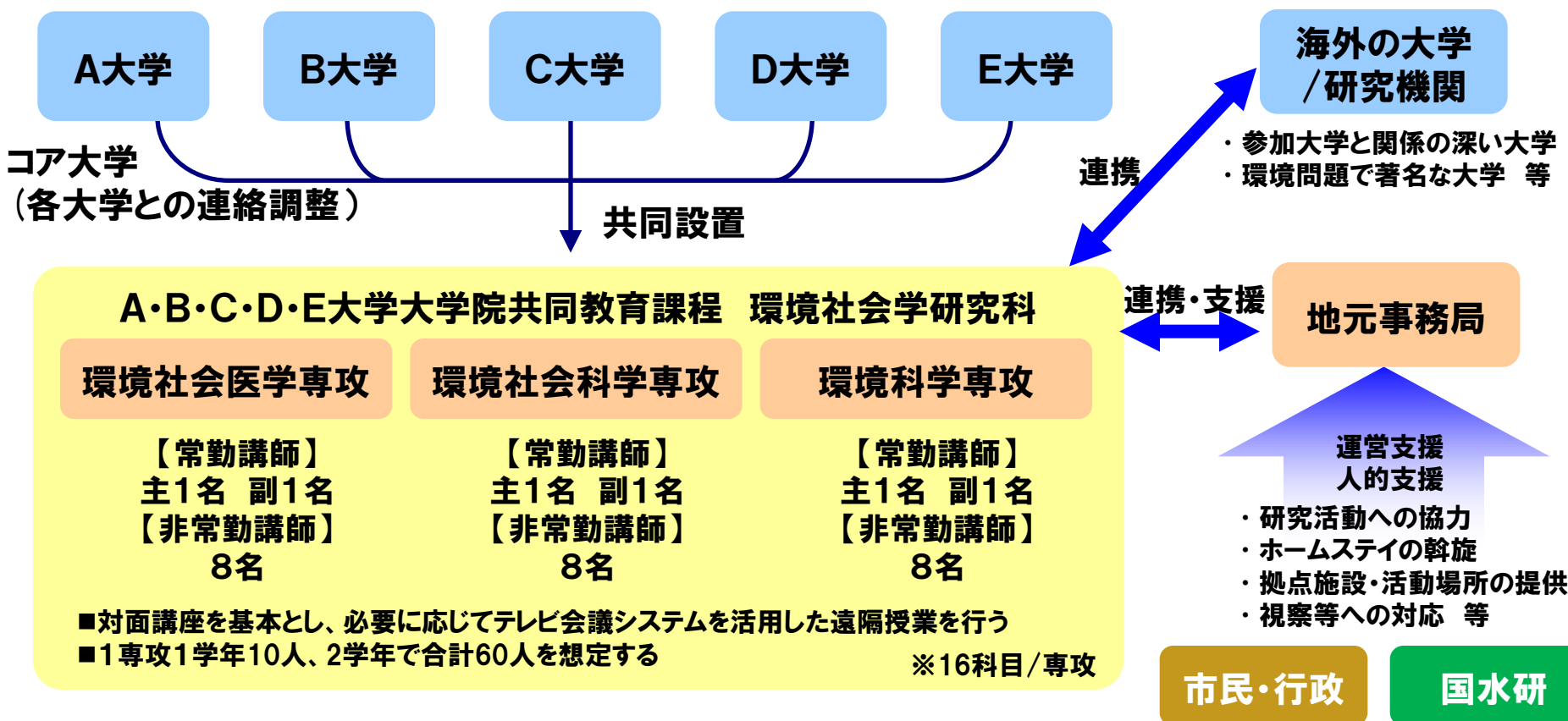
水俣で今後取り組まれていく環境まちづくり(環境首都水俣、環境未来都市、スマート・コミュニティ、等)を研究素材として、市民・企業・行政との協働による実践的なまちづくり活動を通じて「心豊かな公共空間」を実現するため手法や仕組みについて研究する。

③ 環境社会科学(環境と経済)

水俣で今後取り組まれていく環境政策、産業経済政策を研究素材として、環境と経済が両立した地域社会の実現に向けた研究課題に取り組むことにより、「環境で食べていく」ための実践的・実用的な知識・経験・技術を習得する。

5. 水俣連携大学院の設置イメージ

- 水俣の知見を社会全体の利益として具現化するためには工学と社会学を網羅した学際的な研究が必要不可欠であり、複数の大学が連携して共同教育課程(大学院設置基準 第31条)を設置する。
- 新規に市立大学の設置を目指すのではなく、既存大学が持つネットワークやブランド力を活用することにより、国内外の学生や研究者に対する魅力度を高める。
- 市民・行政が協力して地元事務局を設置し、研究活動を地元が全面的にフォローする体制を構築する。



6. 水俣と関わりがある既存大学(例)

水俣との関係

熊本大学	■ みなまた環境塾の取組を通じた連携の実績 ■ 国際的発信機能を持つならば水俣環境大学に手を貸したい(学長) ■ みなまた環境まちづくり研究会(平成22年度)の人脈を活用
熊本学園大学	■ 熊本学園大学水俣学現地研究センターの存在 ■ 水俣に高い関心を持ち継続的に関わる先生が存在
中部大学	■ 水俣に高い関心を持ち継続的に関わる先生が存在 ■ 過去に「みなまた環境大学」に学生が参加 ■ 本年3月「みなまた環境大学への期待」というテーマでセミナーを開催し、取組の連携について論議
立命館大学	■ 水俣に高い関心を持ち継続的に関わる先生が存在 ■ 過去に「みなまた環境大学」に学生が参加
慶応義塾大学	■ みなまた環境まちづくり研究会(平成22年度)の人脈を活用
東京大学	■ みなまた環境まちづくり研究会(平成22年度)の人脈を活用

7. 現時点で考えられる支援メニュー(案)

水俣連携大学院に対する各種の支援メニュー

市民による支援

- 研究活動への協力(被験者として協力、研究フィールドの提供、データ提供など)
- 宿泊先提供、市民講師、運営ボランティア

企業による支援

- 寄附講座、委託研究費、人的支援、社宅の提供

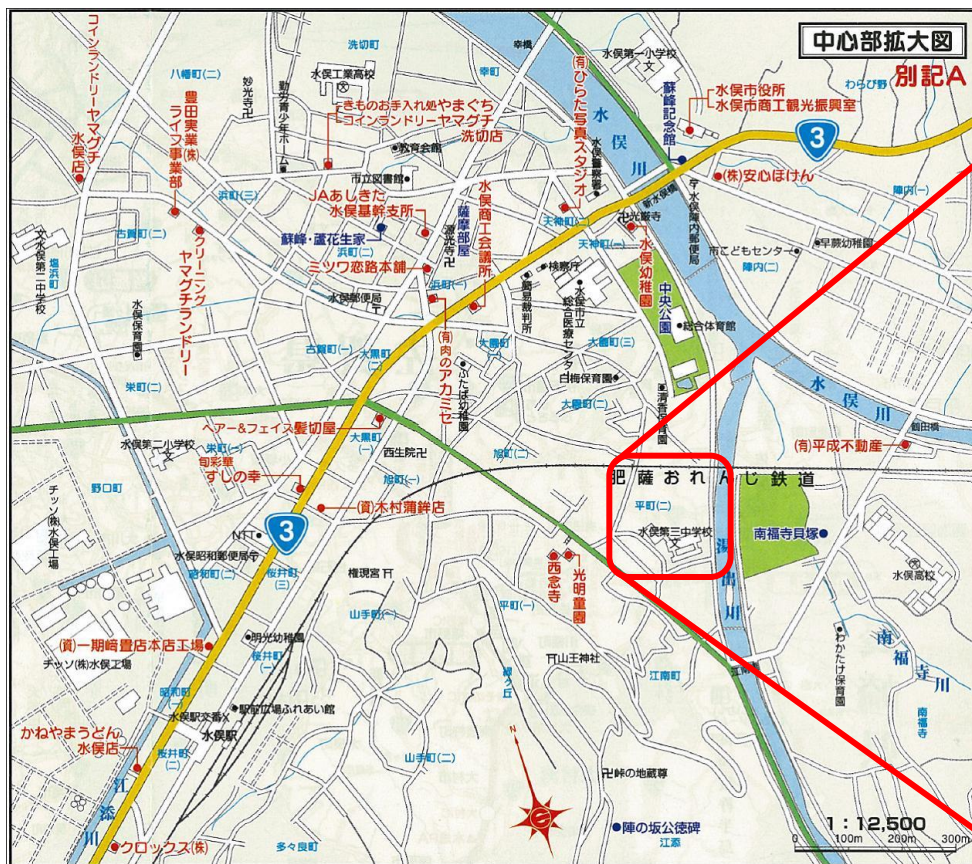
市による支援

- 水俣連携大学院設立準備組織の設置
- 関係機関との調整、コーディネート
- 事務職員としてのマンパワー提供
- 市民ボランティアの育成
- 情報発信支援
- 校舎等施設の整備費、校地の無償貸与
- 固定資産税減免、施設運営にかかる運営費の支援
- 市営住宅の活用
- 環境省や熊本県の支援
- 水俣・芦北地域振興財団の存在

8. 水俣連携大学院の設立候補地

水俣市立水俣第三
中学校跡地を想定

- 敷地面積: 19, 500㎡(市有地)
- 一定規模を必要とする校舎等施設を新築する場合の有力候補地
- 現状の中学校校舎(6,500㎡)は老朽化しているので建替えが必要
(解体費用として5,000万円～8,000万円程度かかる見込み)

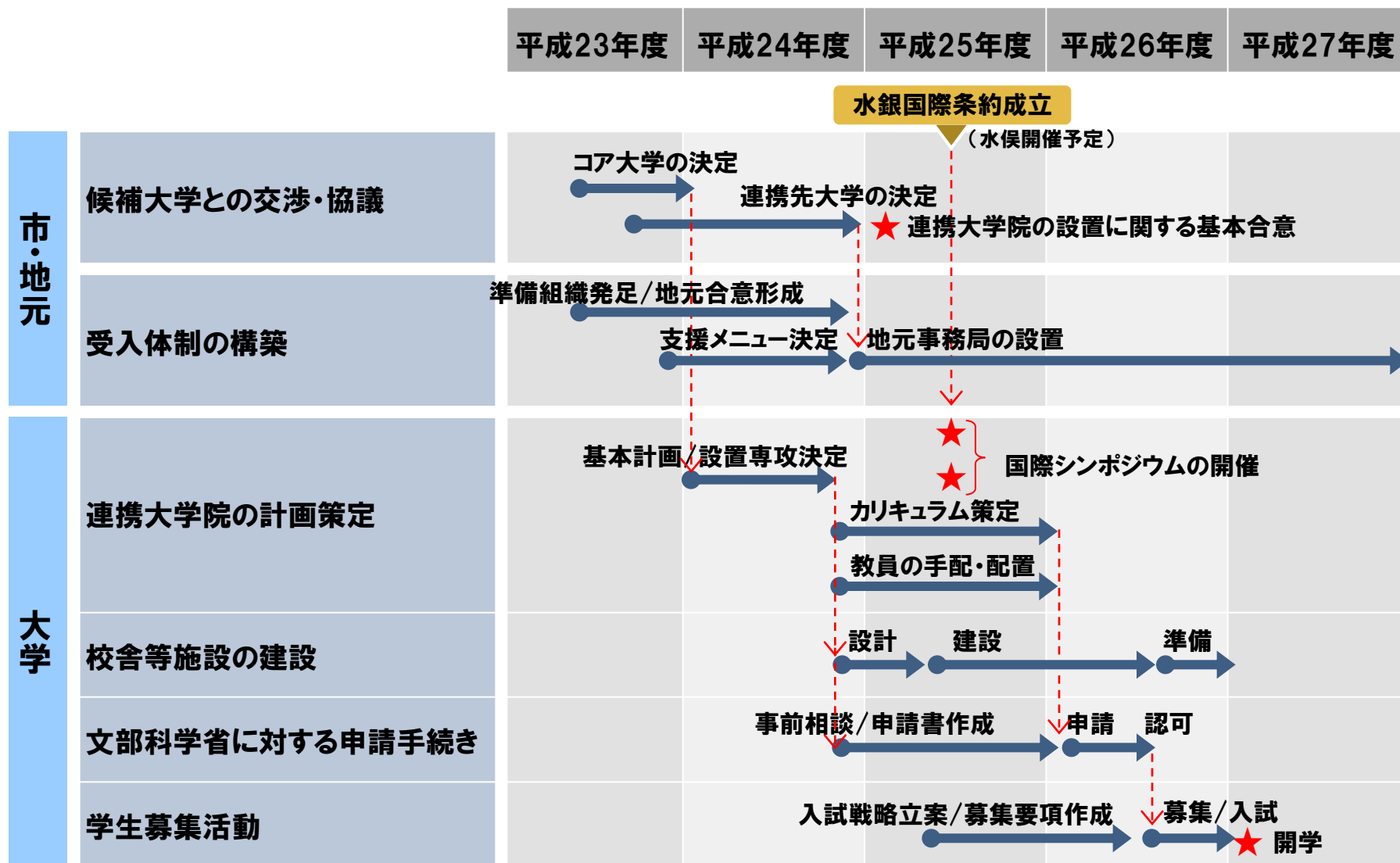


市街地中心部に近く交通至便



出典: わおマップ 熊本県水俣市

9. 設立に向けたスケジュール(案)



第2回合同会議（12月11日）について

■報告事項

・本円卓会議の検討経緯

「水俣連携大学院」を第一目標として目指す。

「大学院リサーチパーク」や「みなまた環境大学・環境塾の機能拡張」は、第一目標を目指す過程でいつでも方向転換できる。

・水俣連携大学院構想（素案）

・今後の予定（大学等に対する営業活動予定）

■合同会議で意見を頂きたい事項

・大学等に対する営業活動に関するアドバイス

どんな営業をしていくのが効果的か、どんな営業方法があるのか。

・他の円卓会議での検討事項の取り込み

他の円卓会議での検討事項で水俣連携大学院に取り込むか要素はあるか。